

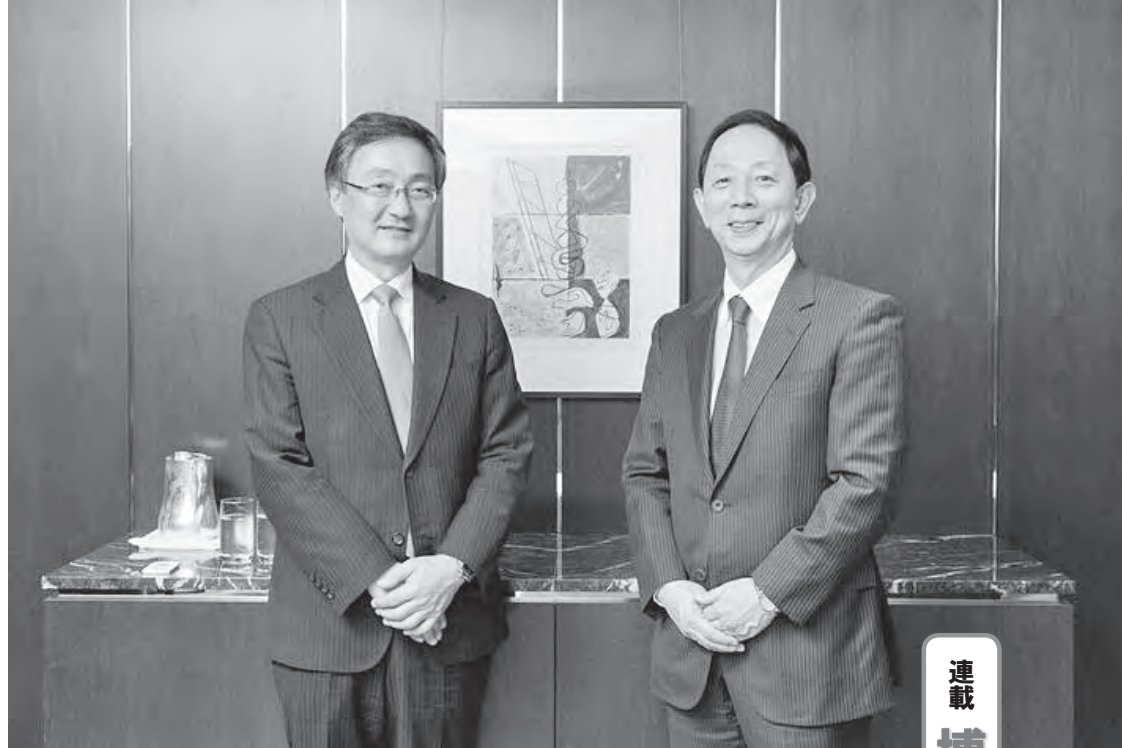
第22回

安嶋 明 — (聞き手) 澁澤 健

(日本みらいキャピタル社長) (コモンズ投資会長)

物書きの原点は子供の頃の読書

澁澤 今回の対談「博聞意伝」には、安嶋明さんにご登場いただきました。『ほぼづゑ』の同人の中では私は最年少の部類であり、安嶋さんはその少し年配者であられますが、ほぼ同世代と言わせていただいていると思います。この「博聞意伝」という対談は、私より先輩世代の方々からお話を伺うことで、私を通じて次世代、未来に向けたメッセージを発していただこうというのですが、本日は、安嶋さんとともに重なり合



澁澤 健氏、安嶋 明氏。

うところを大いに語りたいと思います。

安嶋さんは間断なく『ほぼづゑ』に寄稿されていますが、そもそも『ほぼづゑ』の同人になられた経緯はどのようなものでしたか。

安嶋 私が『ほぼづゑ』同人に加わったのは五十八号(二〇〇八年 秋号)からですが、同人に日本興業銀行の先輩がおられ、その関係で『ほぼづゑ』のことは以前から存じておりました。とくに奥村有敬さんからは銀行時代の業務を通じて諸々ご指導をいただいていたこともあり、私からご相談を持ちかけて同人に加えていただきました。

澁澤 そうですか。安嶋さんの方から加入の意思表示をされたのですか。

安嶋 私は書くことが好きで、機会があれば是非にと思いい、加えていただくことにしました。

澁澤 ものを書くことが好きというのは、小さい頃からですか。

安嶋 必ずしもそういう訳ではないのですが、本を読むことは好きでした。とりたててどの分野というのではなく、子供の頃は沢山読みました。歴史が好きだったこともあって、伝記の類いは片っ端から読みました。

そして、私が読書好きと聞いて、祖父の妹にあたる人が、講談社でしたか平凡社でしたか、世界名作全集が出る度に贈ってくれました。今思うと、世界中の物語を子供向けに分かり易く書かれたものですが、これを読んでいました。小学生の頃ですね。中学になるとクラブ活動中心になって、読書の時間は減りましたが。

澁澤 お話を聞きながら、私も小学生の頃、シートンの動物記を読み耽^{ふけ}っていたのを思い出しました。私は小学二年生の時に親と共にアメリカに渡りましたが、アメリカではシートンの動物記などは読まれていますね。そして、私は『トム・ソーヤの冒険』(マーク・トウェン作)も好きで読みましたが、アメリカで原書を読んだところ、マーク・トウェンの独特の表

現というのでしょうか、難解な英語の言い回しに困り果てた記憶があります。日本に居た小学校二年生までは、あれほど盛んに読んでいたのですが、どうもそれ以来、私は文学少年でなくなりました（笑）。

安嶋 翻訳ものの難しさ、あるいは面白さでと言いますか、言葉そのものを直訳しても、その背景にある文化や背景は伝わりにくいですね。翻訳者が原作者の住む国の歴史や文化を理解していることが大事です。今ちょうど、ノーベル賞の受賞者が発表されていますが、例えば川端康成（一九六八年受賞）などはサイデンス・テッカーという翻訳家に出会ったことが受賞につながったと言っています。言葉自体が文化ですから、どんなに優れた翻訳者であっても、日本のことを知らない翻訳者には、日本人作家の言葉の背景にあるものを外国語に置き換えて伝えることは難しいでしょう。

「昭和」懐旧の拠所——先の東京オリンピック

ようなプレゼンテーションが出来るようになっていた」と書いてあって、これには自分が二十歳くらい齢を取った感じがして愕然としました（笑）。彼らにとってみれば、私も昭和もすでに過去の歴史なんですね。私が生まれた一九五五年は所謂「五五年体制」が始まった年で、戦後十年ということで世の中が大きく変化していった時期でした。高校一年生の彼らにとってみれば、「一九五五年」というのは昭和史のなかで習うことだと改めて認識した次第です。（笑）。

澁澤 なるほど、十六歳の高校一年生にとってみれば六十二年前の出来事ですか（笑）。

安嶋 昭和は六十四年一月七日までと長かったですからね。……私は昭和天皇崩御の時はロンドンで勤務しており、BBCのラジオ放送で知りました。現地のメディアでは「昭和天皇と第二次世界大戦との関わり」を報じていました。なるほどそういう見方があるのか」と思う興味深い、あるいはやや違和感のある論評

澁澤 安嶋さんも私も昭和三十年代の生まれで、ちょうど昭和という時代の真ん中を生きて来た訳ですが、昭和初年から数えて九十年、そして私たち以降の世代のことを考えますと、平成も既に二十九年です。私たちはちょうど真ん中の端境期はぎかいの世代に当たります。ですから殊更に「昭和」を強調すると、若い人たちからは「昔のこと」と思われなくてもありません（笑）。そういった経験はありませんか。

安嶋 先日、兵庫県豊岡市にある高校で、その一年生に話をする機会がありました。何を話すか色々考えた末、各人の「ライフ・ストーリー」つまり生活の記録や自分達の歴史を振り返ってみることを提案しました。それで、まず私のライフ・ストーリーを披露してから生徒たちにそれぞれの未来のストーリーを考えてもらうことにしました。授業（？）の後に感想を書いてもらったところ、ある男子の生徒が、「自分も齢をとって人生の終盤に近づいたときには、今日聞いた

もありました。ともあれ、昭和の戦前期二十年は戦争の時代でしたからね。戦後の四十年は、復興期を経て世界的に見ても発展の時代でしたが、確かに「昭和は遠く」になりましたね。これで再来年（二〇一九年）元号が変われば尚更のことでしょう。若い人にとっては、昭和は、私たち世代の感覚で言う「明治、大正」ですよ（笑）。

澁澤 私の子供たちの感覚で言うと、「昭和、だね」「古いよ」というところですけどね。

安嶋 私が生まれた以降の昭和は、日本にとっては発展的で明るい時代だったと思います。……先ほどの高校生の「ライフ・ストーリー」では私も昭和も「過去の歴史」ですが、その点『ほぼづゑ』にくれば若手（？）です（笑）。

澁澤 そうですね、『ほぼづゑ』の同人の中心的な方々は昭和初め頃のお生まれですね。昭和の三十年代生まれの私たちの世代とは、戦争期を潜ってこられたこと

もあり、確かに世代感覚が異なりますね。その感覚の違いは何でしょうね。先の東京オリンピック（一九六四年）とどう関わったかということでしょうか。私は周囲の大人を通じて辛うじて記憶にある程度ですが。

安嶋 私は九歳の時で、マラソンで優勝したアベベ選手（エチオピア）がゴールインしたところも、日本の円谷幸吉選手がトラックで英国選手に抜かれたところも、実際に国立競技場で見ております。それで、先ほどお話しした豊岡市の高校で自分のライフ・ストーリーを語るために調べたのですが、この時のアベベの優勝タイム（二時間十二分十一秒）は当時世界最高記録で、現在の世界最高記録（二時間二分五十七秒 デニス・キメット 二〇一四年）と較べても十分程しか違いません。やはり東京オリンピックの百メートル決勝でボブ・ヘイズ（アメリカ）が出した記録が十秒〇、世界新記録で大騒ぎしたものでした。そうしてみると半世紀経っても人間の運動能力というのはそうは変わらないと

オリンピックでは幹線道路の整備や高速道路網の建設で、東京の景観が一変しました。新幹線が出来たのもこの時でした。ただ近年では、オリンピックの開催に巨額の資金が掛かるということが問題になり、いかに簡便に運営出来るかが問われています。時代の変化であろうし、またそれでいいのだろうとも思いますね。

洪澤 おっしゃるように、先の東京オリンピックでは社会インフラが格段に改善されましたね。社会制度も整って先進国の仲間入りを果たしました。すると、二〇二〇年の東京オリンピックの開催によって、日本は、東京は、一体どのような変遷を遂げようとしているのでしょうかね。開催前と後でまったく変わらないということはないと思いますが。

安嶋 そうですね、成熟した国としての大会開催、運営の妙をいかに示せるかということでしょうか。
洪澤 期待したいのはそこですね。あの時日本は成熟した先進国として成長した」と言われたいし、そう

言うべきか、いや進歩というのはそういうものなのか考えてしまいました。ただ、先の東京オリンピックを實現して知っているということは貴重な体験として語ったわけですね。

洪澤 そして、二〇二〇年の東京オリンピックが程なくやって来ます。何か感慨はありますか。

安嶋 オリンピックを東京で二度体験出来るということとは有難いことだとは思いますが、先程の記録の話ではありませんが、ではこの間、何がどのくらい進歩したのだろうか、という思いもありますね。前の東京オリンピックの時は参加国・地域は九十三でした。この時はまだ東西ドイツ統合前で、東西統一ドイツとしての参加でした。中国はまだ参加していなくて台湾が国旗の代わりに梅花旗を掲げて参加していました。そして、昨年のリオ・オリンピックは二百六の国・地域が参加しています。二〇二〇年の東京オリンピックはどうなるのでしょうか。そして何よりも、前の東京オ

した成果をいかに示せるかということでしょうか。ただ、報道で知る限りにおいては準備が間に合うのかという心配もありますね。

安嶋 リオ・オリンピックの折、準備が遅れているという報道に、日本ならこういうことはないだろうと思っていました、人ごとでなくなってきましたね。

洪澤 東北震災の後遺症でしょうか、建設関係においても人手不足が甚だしいようですね。しかしこういう時にこそ、ハードの物造りに頼らない、柔軟なソフト運用の妙味を示して欲しいのですが。

安嶋 そうですね、やたらにお金の掛る路線を辿るのではなく、近代オリンピック発祥の折のクーベルタン男爵の理念を見直すべきだと私も考えます。先の東京大会での「東西統一ドイツ」チームではありませんが、人種や国の境を越えて、純粹にスポーツを通じて世界平和を希求することこそ大切なのではないのでしょうか。そろそろ、国の威信を賭けて覇を競うだけではなく、

そういった理想にも立ち返るべきでしょうね。

洪澤 そうでなくても、世界的に見ても世の中ギスギスしていますからね。今度の東京オリンピックを原点に、日本がホスト国として、そうした柔軟な運営が出来るかと思っていますね。そうした理想に帰帰出来るということは大切なことだと思います。

若者気質と社会との相克

洪澤 豊岡市の高校生との「ライフ・ストーリー」を伺いましたが、安嶋さんはどのような高校生だったのですか。

安嶋 私の高校生時代は、まだ学園紛争たけなわの頃で、今の高校生とはだいぶ様子が違いましたね。背伸びしたがるというか、生意気盛りでした。私に通った高校はいわゆる進学校でしたが、勉学一辺倒ではなく、クラブ活動が活発な学校でした。むしろ、受験勉強を専らとするガリ勉を見つけると、何かと揶揄してから

生が全校集会で、「学生が授業をボイコットするとはなにごとか！」と一喝すると生徒の中から「ナンセンス！」という声があがるという、そういったやり取りがありました。先に「学園紛争たけなわの頃」と言いましたが、世間的には、七十年安保や成田闘争が声高に議論されていた時代で、私の高校からも闘争に参加している者もいました。あの時代の世情と言いますか、社会の看過出来ないことに対して、熱く反発の声を上げようという意識の強い時期でしたね。やがて、浅間山荘事件（一九七二年）の発生と落着によって、そういった潮のような熱気が退いて行った、という時代でした。

洪澤 学園紛争にしろ社会的な闘争にしろ、当時の若者たち、つまり今の我々世代のことですが、一体何に對して怒り、反発していたのでしょうか。そのエネルギーはどういうものだったのでしょうかね。

安嶋 大変難しい問題ですね。シンクロニシティ

かうような気風がありました。そのくせ、哲学書や文学書などを手挟んでみたり、恰好をつけるようなこともありました（笑）。また学園紛争のなごりということとで言うと、今でもよく覚えていますが、都会の高校ということもあつたからなのでしょうが、生徒の中には街頭デモに加わる者もいました。私が高校一年生の時に沖縄返還（一九七二年）がなされたのですが、沖縄がアメリカの施政権を脱してやっと日本に帰ってくるという時に、我々のように安穩あんゑんとしていてもいいのか、と言いだす者がいて、沖縄の本土復帰を考えてみよう」と、全学ストライキを打ちました。高校生の全学ストライキは何をするかというと、全校規模の授業ボイコットですよ。

洪澤 それはすごいですね。

安嶋 朝から授業をボイコットして、校庭に集まって、沖縄の歴史のことなどを声高に議論するのです。当時の先生方は大変だったと思いますよ。その後、校長先

という言葉があります。「空間的に離れた所で何らか一致する出来事が同時に起こる現象」というような意味合いですが、ベトナム戦争を始め、一九六〇年代から七〇年代にかけて、世界的に不穏で世情不安な状況がありましたね。そういった空気と言うか、時代に対する怒りであつたり、反発ということなのでしょう。現在のポピュリズムの隆盛もそうした現象の一つなのでしょう。では当時の若者の心情はどうかというと、そうした潮流や空気を読んでいたというのではないでしょうが、何か行動を起こして発言をしなければ、という焦燥感のようなものがあつたかもしれません。沖縄が返還されるからといって、高校生が全学をあげて授業をボイコットしても何かが変わるといえるものではないのでしょうか、何かを考えなくては、行動しなくては、というような、社会的な出来事と自分達の立ち位置を探っていたということなのでしょうね。

洪澤 なるほど、そういった意味では現在の若者、学

生は醒めてしまっていますね。今の中・高校生は沖縄返還というような社会問題が発生しても、おそらくそういう行動は起こさないでしょうね。

安嶋 むしろそうした行動は恰好悪いと思われるかもしれませんね（笑）。ただ、これは醒めていると言っているのか、諦めていると言っているのか、それでもまた立場や時代が変われば、受け止め方や行動も違ってくるのかも知れません。

洪澤 すると今の若者は社会的に無関心というのではなく、問題意識の違いということなのでしょう。

安嶋 問題意識云々は別にして、仮に自分を取り巻く社会的な現象に関心を示さないということであれば寂しいですね。現状に満足しているのであればまあいいとしても、端から諦めているのであれば困りものです。私たちの高校生の頃、『三無主義』という言葉が流行りました。「三無」、つまり「無気力、無関心、無責任」ということで、若者に三無主義がはびこっている

ネットを縦横無尽に使いこなして、どんどん未知の世界を取り込んでゆく。一方、インターネットは自分が好む情報しか取りにいかない。そうすると、同じような情報しか目に入って来ない。このように視野を狭めることもあると思います。ですから、どんどん広がって進む層と、何もかも面倒くさい、無関心という層との格差が広がってゆくということでしょうね。

安嶋 そういう時代になってくると自立というか、主体性を維持してゆくのは大変かも知れません。

私の父が九十五歳で、今体調を崩しているのですが、世代的には大正の生まれで、旧制高校を出て戦時中は学徒出陣で応召しました。ですから大学時代はじつくり勉強する違がなかったたので、学問とか知識とかに対する思いは強かったようです。あの時代に学問とか知識を存分に享受出来る人は限られていたでしょうからね。その点、現在は制約が少ない分、有難味が薄くなっているということは言えるのでしょうか。

『三無主義ではいかん』という論旨なのですが、今はそういうことも言われなくなっているというのが現状ではないのでしょうか。もうそういうことすら気にもしない、毎日が楽しければいいじゃあないか、というようになってしまうと心配です。

ただ、実際に高校生と話をしてみると、この間の地方都市の附属高校の生徒でも、みないろいろなことを一所懸命考えています。それこそ私たちの高校生の頃よりもずっと真剣に考えているとも感じるわけで、悲観することはないように思います。

洪澤 私が接点を持つ十代、二十代の若い人たちは、とても優秀です。能力も高いし、意識もあるし、行動力もある。私の彼らと同年代の頃のことを考えると、とても及びません。ただ、私と接点を持つ若い人たちは極く一部の人たちでしょうから、若い人すべてがそうだということではありません。これはインターネットを使うことに起因するのもかも知れません。インター

金融の世界を選択、「みらい」を拓く

洪澤 今お話していただいた、若者の自らの進路の選択ということに繋がると思うのですが、安嶋さんご自身は金融の世界をお選びになりましたね。金融は一九八〇年代から今日までのおよそ四十年間の間に、大きく変化して来ましたが、その中でキャリアを築いてこられました。その総括といえますか、これからの金融の行き方とか、存在感といえますか、安嶋さんのお考えをお聞かせいただけますか。

安嶋 総括するほどきちんと考えたことはないのですが、この分野は洪澤さんと共通の世界でもありますね。私は日本興業銀行に入って、八三年にロンドン支店勤務になり、以降八〇年代はまるまるロンドンで過ごしました。私がロンドンに赴任する前の日本では、ようやく東京オフショアマーケット（注…金融自由化の観点から制度上、制約の少ない内外遮断型のマーケットを

作するという発想)の議論が始まったくらいの段階でした。私は日本の金融市場をよく知らずに、いきなりロンドンのシティーといわれる、世界中のマネーが集まる自由なマーケットに出会いました。それでシティーのマーケットが私の基準になってしまいました。ですから、当時の日本の金融界の標準から育った人とは違うかもしれませんが、ただ若い時にシティーで仕事をして、「マーケットというものはこういうものなんだ」ということを身体で体感出来たということは得難いことでした。ロンドンでは最初経理担当でした。当時私は英語が堪能であった訳でも、経理の経験があった訳でもなかったのに、いきなり経理を任されて、しかもちょうどその頃にデリバティブ(金融派生商品)、通貨スワップ取引と言われる新しい商品が出て来て、本当に大変な思いをしました。

ロンドンは世界中のマネーが集まっていて、当時二十八歳の経理班長の私は、朝やることと言えば、シ

になる」と言われたものです。不動産を買ったり、インフラ開発に投資をしたりということです。ただ私は、こんなにやみくもにお金を使っているのだろうか、素朴に疑問に思ったものです。当時は「ジャパン・アズ・ナンバーワン」(註…アメリカの社会学者であるエズラ・ヴォーゲルの著作)と言われていた状況でしたが、私は為替の変動をずっと見ていて、こんなことで突き進んで行って、為替が反転したり、不動産が暴落したらどうなるのだろうと思わずにいられませんでした。実際に八七年に「ブラック・マンデー」があり世界のマーケットは暴落しました。ただその時は日本はまだまだ元気でしたから、その後日本市場自体はすぐ持ち直したのです。でも、その十年後の九七年、その頃私は香港に居ましたが、アジアの通貨危機があったときには、日本も金融危機に陥っていて、護送船団方式で絶対潰れないといわれていた大手銀行や証券会社が破たんしてしまったのです。八七年頃の勢いと九七年との

ティーで取引されている通貨の為替レート(前日の終値)をコンピュータにインプットすることでした。十三通貨くらいありましたかね。まだEUが発足する前で、それだけの通貨が売り買いされて、マーケットが動いていきます。マーケット(市場)感覚とよく言われますが、市場というものが、どう動くのかを将に体感しました。私は大学では経済学部で学びましたが、当時の経済学の前提というのは、いわゆる均衡理論で、完全情報を得たマーケットの参加者が、すべての情報を合理的に判断しながら行動することによってマーケットは均衡に向かう、ということでしたが、実際に体感したのは「マーケットは均衡しない」ということです。

洪澤 そうでしょうね。

安嶋 私がロンドンにいた八五年に、プラザ合意があり、この頃からバブル期に突入してゆくのですが、この間、毎日のように日本の投資家がやって来て、ロンドンの街並みが日本の投資家のお金でどんどん綺麗

落差といいますが、天と地の違いでした。

洪澤 たった十年の差なんですけどね。

安嶋 そうですね。それで、九七年以降は「デジタル革命」もあって、情報が行き交うのはいいのですが、それによって更に市場の振れ幅が大きくなっていったのです。洪澤さんはご存知かと思いますが、九八年にLTCMというヘッジファンドが破綻して大損した人が大勢出ました。このファンドはノーベル経済学賞を受賞した経済学者たちが運営していることが「ウリ」だったのですが、市場の動きは、およそ経済理論では測れないということですね。九七年にアジア通貨危機があつて、さらにその十年後にリーマン・ショックがありました。私は、金融のマーケットがどう動くかというのを予測することは難しい、出来ないと思っています。マーケットが正確に予測できれば大金持ちになれるのですが、それはありません。ただ何十年かに一度くらいクラッシュ(相場の急落)が来ると

いうことは、そういうものだと思っています。

私自身は二〇〇二年に興銀を退社して、「日本みらいキャピタル」というエクイティ投資ファンドの運営会社を作りましたが、マーケットがずっと一方向に動くとは、一貫して考えていません。今、日本の経済は比較的好調と言われていますが、またクラッシュはあり得ると思っています。ですから、最初のご質問の「総括」ということはおよそ程遠いと思いますが、ITの進歩により情報が以前にも増して、スピーディーに伝達されると同時に、市場のグローバル化に伴い金融取引の規模も大規模化しており、その分そのアップダウンのインパクトも昔よりもずっと大きくなって来ていると考えます。従って、企業経営にしてもマーケットについて、頭で分かっているというよりも、身体感覚で分かっている必要があるということで舵取りが更に難しくなっていると感じています。

洪澤 これは根拠のない心配事かも知れませんが、

では、本当にいいことばかりかと言えば、今振り返って、必ずしもそうとは言えないということになってきています。

洪澤 なるほど。金融のことから世界経済の動向に触れて、縷々ご高説をうかがって来ました。次世代へのメッセージも既に多くいただいたと思います。最後に、さらなる未来への提言に添えていただく意味で、ご自身で設立された会社「日本みらいキャピタル」という社名を付けられましたが、その社名の由縁をお話してくださいますか。

安嶋 それほど深く考えて付けた訳ではないのですが、二〇〇二年に銀行を辞めて会社を作った時が、まさに日本の景気も株価もどん底でした。金融機関が不良債権に戦々恐々としていて、メガバンクの破たんもあるんじゃないか、という状況にありました。私が務めた日本興業銀行は、もともと中長期的に産業や企業を育てていくために設立された銀行でした。ですからお

八七年、九七年、二〇〇七年、そして今年、二〇一七年だよな、と考えています。マーケットというものは機械的なものではなく、人間の感情がそこに集約されているもので、そして、感情は上がったりがったりする周期性があるものですから、市場も景気もいろいろな人間関係をも包含していると考えた方がいいのかな、と思っています。

安嶋 そうですね。だから七〇年代から八〇年代とグローバルな経済が進んでいく上で、金融マーケットもそうだし、経済に対する見方や価値観も変化していかなければなりません。欧米の民主主義は、資本主義と表裏一体で成長してきました。資本主義が発展することで世の中が豊かになり、人々がより自由になって行くと思われていました。そして八〇年代末にベルリンの壁が崩壊して、次いでソ連邦が無くなって、やはり資本主義が勝利した、と言われました。しかし、金融自由化に代表される、グローバル化の流れについ

金を出すだけではなく、企業経営や人材育成にも力を注いで行こうという、そのためのネットワークを提供する銀行だったのですが、九七年以降、興銀に限らずそういうことが出来る環境ではありませんでした。一方で当時も現在も日本の企業の中には、経営戦略を見直したり、事業の在り方を変えたり知恵を出している、まだまだ成長して行ける事業や、会社があるだろうということ、それを官主導ではなくて、民間のリスクマネーを活用することで未来を創生していきたいというのが会社設立の理念です。社名はそのことに沿って付けました。

洪澤 なるほど、よく分かりました。本日はありがとうございました。